



FIGURE 青・壮年期の波多野完治氏を支えた人びと (守屋作図)

われわれの取り組むべき課題ではないだろうか。

文章心理学の課題—波多野文章心理学再考

内田 伸子

1. 芸術・科学・教育実践の統合

文学界で近代読者論が起こり心理小説が台頭した時代背景のもと、波多野文章心理学がうち立てられた。波多野は、第1に、思想と文章の一致が困難であること、第2に、心理小説の勃興により心理の叙述、分析、解剖が重要視されるようになったことから「新しい文学の開拓のためには文章研究が不可避の前提」であると考えて文章研究に取り組んだ。「文章修飾の創造は新しい考えの創造に他ならない」(『文章心理学』)という視点から独自のディスコースの分析法を編み出し、統計的手法を駆使して作品の構造分析や作家の性格や読者の評価の違いを生む心理学的基礎を解明した。これによって、文学の主

観性を排除し、文章研究として、客観化・科学化を図った。

2. 波多野文章心理学の成立過程

- (1) 草創期 [1935~1945] 作家の文体の調査に着手。評価は分かれ心理学者の間では不評、国語学や言語学者からは支持された。
- (2) 円熟期 [1945~1960] ①日本語文章の標準文体、②新聞文体、③女流文体の解明、④チャタレー裁判への協力；行動心理学的方法と解釈学的方法により作者の内部にわけ入り、その創作心理を作者と同一化しつつ把握。猥褻文書で「ない」という心理学的な証明は、第一審での勝利を導いただけではなく、何よりも「文章心理学の勝利」を物語るものである。
- (3) 啓蒙期 [1960~] ①新しい展開；芝祐順や安本美典などが出現シクロズ法や多変量解析を文章理解や文体研究に持ち込んだ。②投影法の適用；片口安史が作家

に「ロールシャッハ検査」を実施したのに触発され、作家論や色彩語の研究に適用した。③啓蒙の仕事へ；外国の文章心理学の現状を見渡し全体を大観し、今後の道案内をする仕事に勢力的に取り組む。啓蒙期は、アルンハイムとの親交と軌を一にして、視聴覚教育の体系化の時期と重なっている。前者は言語を、後者は非言語を扱う点では別物だが、どちらもコミュニケーションという共通項をもつものであると考えて体系化したところに波多野文章心理学の特色が見られる。

3. 現代の文章心理学

認知科学の洗礼を受けて第1に、リストや文の記憶研

究から、文章や談話の理解研究へ、第2に、情報処理の結果から過程へと着目点が推移することにより、内観法や発話プロトコル法も使うようになった。読み手の知識に中止点を移し、「状況モデル」の構築研究へと関心が推移している。波多野文章心理学に比べてリサーチ・クエストや方法論の矮小化が見られる。今こそ波多野文章心理学の遺産を継承し、その発想や方法論のスケールの大きさに倣い、「情報単位」ではなく「意味」を、無機質な「こしらえもの」ではなく血の通った「ディスコース」を扱える文章研究へと軌道を修正すべき時にある。